

# 小唄お政

野村胡堂

—

「八、大層手前てめえは意気になったな」

「からかつちやいけません、親分」

八五郎のガラツ八は、あわてて、膝小僧を隠しました。柄がらにない狭い単衣、尻をまくるには便利ですが、真面目に坐り直すと、帆立ほったて尻じりにならなければ、どう工面をしても膝小僧がハミ出します。

「隠すな、八、ネタはちゃんと拳がつてるぜ」

銭形平次は構わずに続けました。

「へッ、へッ、どの口のネタで？」

「いやな野郎だな、顎あごなんか撫なでて、——近頃てめえ手前、遠吠とおほえの稽古けいこをするつてえ話はなじゃないか」

「遠吠は情けねえ。誰がそんな事を親分にいい付けたんで」

ガラツ八は少しばかり意気込みました。

「手前の伯母さんだよ。——今朝お勝手口へ顔を出して、お静ぐちに愚痴ぐちを聞かせていたぜ——酒や女の道楽と違ちがって、若い者の稽古けいこ所しよ入いりが悪いではありませんが、家へ帰かえつて来て唸うなられると気が滅め入いります。糠味ぬかみそ噌その蓋ふたに仔細しじゆはございませんが、あんな調子てうしつ外ほかれの遠吠を聞きかされたら、どんな気の強つよい娘むすめも寄りつかないだろうと思おもうと、可哀想あはれなでなりません。御存ごぞんじの通り、あれはまだ独ひとりり者ものですから——だとさ。どうだい八、伯母おばさんは苦勞くろう人ひとだろう。あんまり心配しんぱいさしぢやならねえよ」

「チエツ、憚はばかりながら娘むすめっ子除はずけの禁呪まじないに小唄こぶたをやっているんだ。心配しんぱいして貰もら

いたくねえ」

ガラツ八はそう言いながらも、耳の後ろをポリポリ搔いております。

「そうだろうとも、だから俺は言つてやつてよ。——伯母さんの若い時と違つて、この節はあんなのが流行はやるんだ——つてね、小唄一つ歌うんだつて、鼻っ先や喉で転がすんじゃねえ。八の野郎は胆っ玉で歌うに違げえねえ。——」

銭形平次に悪気があるわけでなかつたのですが、伯母の口吻こうぶんから察して、ガラツ八の八五郎が小唄の師匠に気がありそうにも取れたので、それとはなしに脈を引いて、意見をするものなら、今のうちに意見をしようと思つたのです。

「親分、本当のことを言つと、こいつにはワケがありますよ」

「そうだろうとも。二日も行かなきゃ、師匠ししやうの小唄お政が、迎えをよこす程だつて言うから、ワケだつて大ありだろうよ」

「嫌だね。伯母さんが、そんな事までブチまけたんですかい」

「人に意見などをする歳じゃねえが、小唄お政じゃお職過ぎる。止す方が無事だぜ、八」

錢形平次はようやく真顔を取戻しました。からかったり、ふざけたり、叱つたりするうちにも、子分の八五郎を思う真情が、行きわたらぬ隈なき心持だったのです。もつとも、親分子分といつても、歳から言えば、幾つも違わない二人です。時々真剣さが顔を出してくれなければ、際限もなく洒落しゃれのめして、隔へだても見境いもなくなりそうな仲でもあったのでした。

「それは心得ていますよ、親分。芝居小唄の千之介、六郎兵衛はともかく、江戸じゃ、お寿ひさとお政は女師匠の両大関だ。吉原から浅草一円、柳橋へかけての弟子だけでも、千人ずつはあると言われるお政が、下っ引のあつしなんかには、洩はなも引っかける道理はありませんがね」

八五郎の話は妙に筋が通ります。

「平次はうさんな顔を挙げました。伯母から聞くと、馬道のお政の稽古所へ、日参しているほど取上のほ気せた八五郎に、こんな分別があるうとは思われなかつたのです。」

「仔細しさいあつて命が危ない、——お願いだから、毎日来て見てくれ——つて言うんで、まさか十手を懷中に突つ張らかして稽古所を見張つてるわけには行かねえ。親分の前だが、この八五郎も馬鹿になつたつもりで、毎日馬道に通つちや、精一杯のドラ声を張り上げてゐるんですぜ、へッ」

八五郎はこう言つて変なところに苦笑を漏もらしました。こうは言いきつたものの、少しは後ろめたさもあつたのでしよう。

「そうかい、そいつは知らなかつた。お政の顔を見ながら、間の抜けた小唄うたなんか唸うなつて、実は大望があつたわけだね。いや、恐れ入つたよ、八」

「親分、まだ、そんな事を」

「だから、その大望を聞こうじゃないか。江戸二人師匠と言われた小唄お政が、命にかかわるほど思い詰めたなら、さぞ口舌くぜつにも節が付くだろう」

平次はまだ本気にはなりきっていない様子です。

「だがね親分、お政が二度も殺されかけているんですぜ」

「何だと？」

話はそれでも、次第に軌道に乗って行きます。

## 二

その頃は隆達りゆうたつ小唄や、平九節ひらく小唄の勃興期ぼつこうきで、江戸にもようやくやく名人と言われた女師匠が現われるようになっていました。

山谷のお寿と、馬道のお政は、その中でも有名で、どららも若く、どちらも美しく、芸妓、素人の隔てなく、男弟子も、女弟子も取って、多勢の狼連と、少数の有力な旦那衆に取巻かれ、少なくとも表面だけは、派手で陽気で、この上もなく結構な暮しをしているのでした。

二人の間には、自然に競争が起りました。同じ芸道にいそしむ仲で、他所眼には、至極うち解けて見えましたが、腹の中では鎬を削り合つて、一人でも弟子を多くし、少しでも評判をよくしようと言つた、両雄並び立たぬ心持でいたに相違ありません。

その間の消息を八五郎はこう説明するのです。

「お政は打ち明けてお寿のせいとは言やしません、去年の暮には、大さらいの晩、危うく水銀を吞まされるところを、弟子の浜名屋又次郎さんに助けられ、今年の夏は涼船から突き落されたのを、船頭に引上げられたと言いますぜ」

「なるほど、そいつは物騒だ。——それで、用心棒の代りに手前てめえを呼んで、伯母さん困らせな小唄を仕込んでいると言ったわけか」

「早く言えばそうなんで」

「氣取って遅くなんか言うから解らなくなるじゃないか」

平次もここまで聞かされると、江戸名物の小唄お政の命が心配になります。

「親分、お政は可哀想じゃありませんか。こうしているうちにも、どこから、どんな術てで相手が来るか毎日ビクビクもので暮していますよ」

「お政の命を狙うのは——まさか、お寿じゃあるまい」

平次はまたこんな事を言うのでした。

若くて美しく、ともすれば、先輩のお政の人気を奪いそうにするお寿は当面かそうてきの仮想敵には相違ありませんが、この市井しせいの芸術家お寿の、なよなよとした夕顔のような淋しい美しさと氣品のある芸を知っているだけに、平次も急には



疑う氣にならなかつたのです。

「大さらいの時は、お政とお寿がいつしよでしたよ。お政がひとくさり歌つて、薄暗い楽屋へ歸つて、湯呑の湯を呑もうとすると、そこにいた浜名屋はまなやの次男坊の又次郎が、師匠の手を押えて止めたそうです。——その湯は変だから、止す方がいいて——」

「——」

「縁側へ持つて行つて見ると、中にはギラギラと水銀みずがねが沈んでゐるんだそうじゃありませんか。懐中鏡の裏の紙はがを剥して、その水銀を湯呑へ入れたに違ひありません。ところでギヤマンの和蘭鏡オランダかがみを持つてゐる者は、そこにはたった二人しかいなかつたと言います。一人はお政で、一人はお寿ひさ——お政は自分の湯呑へ自分の鏡の水銀みずがねを入れる筈はありません」

平次は大きくうなずきました。

硝子製の鏡は非常に珍しい時代ですから、水銀の貼り方も至って粗末で今日のようにエナメルで固めたものでなく、鏡の裏へ紙に延して当て、僅かに枠で押えたものだったのです。今の医学ではあまり信じられませんが、——水銀を呑めば、声が潰れると一般に信じた時代、小唄の師匠に致命的な打撃を与えるためには、そんな事をする者もあつたのでしよう。

「大さらいの場所は？」

「山谷の清松きよまつの二階を打つこ抜いたそうですよ」

「それから、涼船の一件は？」

平次の探求欲は活潑に働き始めました。

「この時もお寿といっしょで、——お蔵前の山口屋が、二人を伴れて柳橋から船を出しました。両国の下へ舫もやって、歌う、飲む、踊るの大騒ぎです」

「手前もいっしょかい」

「とんでもない。岡っ引きがいっしょだった日にや、灘なだの生一本が、大川の水みたいになる」

「大層物事に遠慮するんだね」

「とにかく、さんざん騒いだ揚句、無理強いみよしの酒が廻って苦しくてたまらないから、お寿を誘さそって、お政は舳みよしへ出たそうです」

「お政の方が誘ったんだね」

「おかしいのはそこだけですが、誘われたお寿がはつきり言うんだから嘘じゃないでしょう。お政は何とも言いません、が、舳で風に吹かれているうちに、川へ落っこった事だけは確かです」

「落っこったのか、お政が？」

「それもお寿の言い草で、——多分酔った顔を風に吹かれて目が廻ったんだろ

う。お政さんはフラフラツとすると、真つ黒な水の中へ落ちた——とこうなんだそうですよ。もつとも、お政に言わせると、呑んだと言っても、川へ落ちるほど酔つてはいなかつた。好い心持で夜風に吹かれていると、いきなり後ろからドンと突かれたような気がする——とこうです」

「そこにはお寿とお政の外には誰もいなかったのかい」

「山口屋と取巻きの連中は屋根の下で、お爛番かんぼんと船頭はとも臙ともでさ」

「成程な」

「お寿はあんまりびっくりして声も出なかつた。ア、ア、とやううちに、五六間流されたお政が、幸い通り掛かつた他の涼船の船頭に引上げられて、散々水は呑んだが、命だけは助かつたそうですよ」

「それは危ないな、お政は水心がなかつたのか」

「小唄の師匠が泳ぎを知っているわけはありません。もつとも、突き落される

と、前もって解っておれば、泳ぎの稽古位はしたかも知れませんが――」

「皮肉を言うな、八」

「ところで親分、これがあべこべだと話になりませんよ。お寿は佃つくだで育つて、あんな華奢きゃしゃに見えるくせに、泳ぎは河童かっぱの雌めすほどうまいそうですよ」

「河童に雌があるのかい」

「雄おすがありや雌だつてありますよ」

無駄は入りますが、ガラツ八の話は次第に面白くなります。

「それから、八五郎さんの弟子入りとなつて、一日顔を見せなきやア、呼出しが来ると言うわけか」

「へッ」

「満更じゃねえな、八。小唄お政に呼出しをかけられるのは、一千人という弟子てめえの中でも、手前一人だろう」

「まだありますよ」

「誰だ」

「浜名屋の冷飯食いで——」

「又次郎か」

「それから山口屋の旦那」

「大層気が多いんだな、それがお政の情夫と旦那か」

「だからあつしなんか、本当の用心棒で」

「気が弱いじゃないか、——今日もこれから行くんだろう」

「へッ、行かなきゃア、又呼出しだ」

八五郎は少しばかり脂やにさが下りました。

「厭な野郎だな——まあいい、お政に逢ったら、そう言ってくれ。平次も弟子入りをしたいが、どうだろう、今日明日はいけないが、明後日あさってあたり行つて見

るから——つて」

「本当ですかい、親分、それは」

ガラツ八の鼻の下は長くなりました。

「誰が嘘を言うものか、放って置くと、大変な事が起りそうだ。用事が一応片付いたら、きつと行って、この平次が見張ってやる。口幅つたい言い草だが、大船に乗ったつもりで待っているようにって言うんだよ」

「驚いたな」

ガラツ八は呆氣あつけに取られました。大きな口を利くのを、馬鹿みたいに思っている平次が、こんな自惚うぬぼれきつた事を言う真意が呑込み兼ねたのです。

三

「大変ッ、親分」

ガラッ八は、翌る日の晩、鉄砲玉のように飛込んで来ました。

「何が始まったんだ。相変らず騒々しい」

平次はそう言いながらも、充分期待していたらしい顔を挙げたのです。

「お政がやられましたよ、親分」

「引搔かれるか、髪でも捲むしられたんだろう」

「それどころじゃねえ、親分——あ苦しい、浅草からここまで駆けて来たら、物が言えねえ」

「馬鹿、それだけ口が立ちゃ沢山だ、早く言ってしまいな——まさかお政が殺されたんじゃないな」

「殺されましたよ」

「何だと」



「この眼で見て来たんだ。間違いつこはねえ、もう三輪みのわの万七親分がやって来て、お寿ひさを調べていますぜ——あんなにお政に頼まれたのに、少しの油断でやられましたよ。三輪の親分に下手人を挙げられちゃ、この八五郎の男が立たねえ、親分、お願いだから行って見て下さい」

八五郎はもう、銭形の袖を引いて、力ずくでも引張り出そうとしているのです。

「三輪の兄哥の縄張だ。そいつは御免蒙ごうむろうよ、八」

「親分、それじゃお政が可哀想だ。いえ、この八五郎が可哀想じゃありませんか。あんなに頼まれた癖くせに、指をくわえて引込んでんじゃ」

「よしよしお前には敵かたわねえ。——とにかくちよいとだけでも覗いておこう。この殺しは一風変つていそうだ」

何を考えたか平次は、思いの外気軽に支度をすると、八五郎といっしょに、

浅草へ急ぎました。

「お政の家なら馬道じゃないか」

馬道を横に見て新鳥越しんとりごえの方へ行こうとするガラツ八を呼止めました。

「それが不思議なんで、——お政は昼過ぎから山谷のお寿のところへ行つて、珍しく油を売り、薄暗くなつてから、お寿に送られて新鳥越まで来て、正法寺しょうぼうじの前で別れたんだそうですが、これはお寿の言い分ですよ、親分」

「——」

「その正法寺前の路地で、血だらけになつて死んでいたんです」

「誰が見つけたんだ」

ちようちん

「提灯ちようちんを持って迎いに行つた権助が、新鳥越の路地に人立ちがあるんで、何の気もなしに覗いて見ると、師匠のお政が殺されているんだそうじゃありませんか。町役人に届けて、あわてて帰つたので、馬道にいた弟子が二三人、宙ちゆうを飛

んで行って見ました」

「誰と誰だ」

「あつしと浜名屋の又次郎と、権助と、染物屋そめものやの勘次と、——そんなものでしたよ」

そんな話をしながら、平次とガラッ八が現場へ駆けつけた時は宜い塩梅に検屍が済まないのです、路地の死体もそのまま、番太の老爺が立番をして、町内の弥次馬が、怖い物見たさの遠巻きに、月の光にすかしております。

「筵むしろを取って見な、八」

「へエ——」

死体に掛けた筵を取ると、番太は心得て提灯を差出しました。

「あッ、これはひどい、——何という虐むじたらしい事をしたんだ」

平次が言ったのも無理はありません。

月の光に蒼ずんだお政の死顔は、全く思っても見ない痛々しいものだったのです。

何分にも凄まじい血です。

晴着らしい単衣ひとえの胸から腰まで蘇芳すおうを浴びたようになって、左顎の下へ、斜に開いた瘡口きずぐちは、それほど大きいものではありませんが、ようやく脂の乗ってきた豊満な大年増の顔は、蠟ろうのように蒼ざめて、月の光と、提灯のあかりの中に、言いようもない不思議なニュアンスを醸かもし出しております。

美女の死体の凄まじさに、平次もさすがに躊躇ためらいましたが、しばらくすると、番太の提灯をガラッ八に差出させ、馴れた順序で、髪形から、着物の崩れ、手足の投げ出された方向から、血の流れよう、傷口の模様まで、恐ろしく念入りに調べ始めました。

「八、何か掴んでいるようだ。左の手を開けてみな」

「へエ——」

八五郎はお政の死体の冷たい掌てを開けました。

「ありましたよ、親分」

「何だ」

「毛」

「どれどれ」

ガラツ八のつまみ上げたのを見ると、紛まぎれもなくそれは女の髪の毛です。懐紙を出して、その上へ置くと、長短不揃ちぢいなのが三本、いずれも少し赤くて、縮ちぢれているのがはっきり判ります。

「お寿ひさの毛ですよ、親分」

「判っているよ」

美女お寿は、類たぐいまれ稀な姿と顔形に恵まれながら、何の因果か赤くて縮れた毛を

持っているので有名だったのです。



©2017 萩 柚月

## 四

「刃物は？」

平次は四方<sup>あたり</sup>を見廻しました。こんな場合、よつほど落着いた悪党でないと、大概血だらけな刃物は捨てて行くものです。

「三輪の親分も捜しましたが、見当りませんよ」

番太の老爺はそう言います。

「八、念入りに捜して見てくれ。下水の中でなきや、堀<sup>へい</sup>の中だ」

「よしきた」

八五郎は番太の提灯を借りると、いきなり下水の中へ首を突っ込みました。

「かき廻しちや何にもならない。下水を念入りに捜すのは明朝の事にして、堀



の中を見るんだ」

「へエ——」

がしかし、それも無駄でした。

「八、あれは何だ」

しばらくすると、平次は月の光に白々と見える、右手の長屋の板庇いたびさしの上を指しました。

「光るようですね、親分」

「梯子はしごを借りて見てくれ、雨が降った筈はないし、——庇ひさしの上の光るのは変だ」

平次に言われるまでもありません。八五郎は気軽に梯子を借り出して、庇へ掛けると、筒抜けに驚きの声をあげます。

「親分、見つかりましたよ——血かみそりだらけの剃刀」

「有難い、それで何もかも揃った」

柄えに籐とうを巻いた、使い古しの剃刀を受取ると、平次は雀躍こおどりしたい心持になるのでした。

「親分、番所へ行つて見ましようか」

「待つてくれ、ここにゐるなら、お政の弟子たちに一と通り会つて行きたい」

「駆けつけた顔は大概揃つていますよ。権助どん」

「へえ——」

ガラツ八の声に応じてノソリと出たのは、お政の使つてゐる飯炊めしたき、庭も掃はけば使い走りもすると言つた、調法至極な男です。

見たところ五十幾つ、形振なりぶり構わず小金を溜めるより外に望みのない人間で、信州の土の匂いのすると言つた風格には、お政を殺す動機などを持っていそうもありません。

「それから、又次郎さん」

「へエ——」

浜名屋の冷飯食い、飛抜けた道楽者で、親兄弟も構いつけない代り、女の子の達引たてひきには不自由をしない男、二十七八の若い燕型つばめがた、これは一番疑われそうな人間です。

「師匠が殺された時分、どこにいなすった」

と平次。

「馬道ななつに申刻時ななつ分ななつから先刻まで、師匠の帰りを待っていましたよ。八五郎さんもよく御存じで——」

又次郎は少しおどおどしておりますが、大して悪びれた色もありません。

「又次郎さんの言うのは違いありませんよ、親分、ざるじ箆ざるじ碁ざるじを打っていたんで」

「中座しなかつたかい」

「ちよいと、煙草を買いに行きましたが——」

言いかけて又次郎は口を緘つぐみました。馬道からここまでは一と走りです。煙草を買うことにして、人一人殺しに来られない筈はありません。

「煙草入は？」

「――」

黙って平次に渡した煙草入を開けると、印伝いんでんの吠かますには一パイ新しい刻みが詰っております。

平次はそれを又次郎に返すと、もう一人染物屋の勘次と言うのに会いました。これは又次郎よりは少し若く、夕方からガラツ八の相手をして、馬道から一歩も出なかったことが判りました。

「さア行こうか、八」

平次はそこをきり上げて、山谷の方へ向いました。

「又次郎が怪しくはありませんか、親分」

それを追っかけてささやく八五郎。

「何とも言えない。が、万事はお寿ひきに逢つてからの事だ。——それとも、又次郎はお政を怨んでもいたのか」

「そんな事はありませんが、お政が近ごろ旦那の山口屋の機嫌を取り過ぎるんで、又次郎も面白くない様子でしたよ。もつとも、山口屋も浮気で、お政に飽きて、山谷のお寿のところへしげしげ繁々行くようになったそうですから、お政にしてみれば、冷飯食いの又次郎の機嫌などを取っちゃいられたでししょう」

ガラツ八の話を聞きながら、平次は何やら深々と考えております。

## 五

番所へ行って見ると、三輪の万七とお神楽かぐらの清吉が、お寿ひきの責めおわらわに大童でし

た。

「おや、錢形の、大層耳が早いんだね」

万七は顔を上げて、皮肉と敵意とをこね混ぜたような、薄笑いを浮かべました。

「お政は八五郎の師匠だそうでね、放ってもおけないから覗いただけさ。ところで下手人の当りは？」

平次は穏やかにこう言うのです。

「この女さ、間違いつこはねえ、が——旦那方が見えるまでに、口を開けさせなきゃ後が面倒だ」

万七はそう言いながら、板敷の上に崩折れた、小唄お寿の痛々しい姿を指さしました。

小唄お政

まだ二十五六、お政よりは六つ七つ若いでしょう。ちよつと見は二十二三が

精々、色白で、華奢きゃしゃで、なよなよとした陰影の多い美しさは、豊満で肉感的で、少し媚態びたいをさえ持ったお政とは、およそ正反対な感じのする女でした。

羅物うすものを涼しく着て、板敷いとうにもろて双手を突いた姿、縮れた赤い毛をたった一つ難がたにして、このまま、中条姫や、照手姫の絵巻物の中に納められそうな姿です。

「お寿が下手人？ 一応俺もそう思ったが、腑はらに落ちないこともあるよ、三輪の」

平次は下手したてに出ました。

「お政の死骸の手に、縮れつ毛が握にぎってあった筈だ。五六本のうち、三本だけは検屍の御役人にお目にかけるつもりで残して置いたが、銭形あにいの兄あにい哥いがあれを見落す筈はあるめえ」

万七は顧かえりみてお神楽の清吉とうなずき合います。

「これかい、三輪の」

平次は素直に懐ろ紙に包んだ毛を出しました。

「その毛に気がつきや文句はあるめえ。それにお政は、清松の大さらいで水銀みずがねを吞まされ損そしなったことも、涼船から突き落されたことも、銭形兄哥は聞いている筈だ」

「――」

「お政の喉のどの傷は薄刃の刃物で斬られたに違げえねえ。多分かみそり剃刀だろう。剃刀なら女でもあれ位のことは出来るぜ。――清吉をやつて、お寿の家中を捜させ、たが、けさ妹のお文が使つたという、一番よく切れる剃刀がなくなっているぜ、

――多分お寿がお政を送つて行くとき持出し、新鳥越の路地で使つて、血だらけになつたのをどこかへ捨てたんだらう――その剃刀さえ見つければ、口書きほいん拇印おしおきだいがなくなつて、処刑台に上げられる女だ」

万七の言うのは、常識的で無理のない推理でした。



「その剃刀は多分これだろう」

平次は何の蟠わたかまりもなく、血染の剃刀を出しました。

「あッ、どこで、それを」

「現場近くの庇ひさしの上に投げ上げてあつたよ」

「そうか、下ばかり捜していたが——」

万七は忌々しそうに舌打ちをします。

「お寿、——この剃刀に見覚えがあるだろう。正直に言ってくれ」

と平次。

「——」

一と目、お寿はサッと顔色を変えました。血に染んで斑々はんはんとしてはおりますが、柄に巻いた籐や、使い込んだ刃の減りに、見違えようはなかったのです。

「どうだ」

「ハ、ハイ、——どうしてそんな所へ行ったんでしよう」

「お寿の品に相違あるまいな」

「ハイ」

これはお寿に取っては罪の白状も同じことでした。それを聞く万七はもう袖の中の捕縄をまさぐっております。

「錢形の、お蔭でこの女の口を開けさせたよ。剃刀が出さえすれば、こっちのものだ」

「待ってくれ、三輪の兄哥、——お寿の家から剃刀を盗み出せる曲者なら、鏡台の抽斗ひきだしか屑籠から抜け毛を持出すのは何でもないぜ」

「何だと、錢形の」

万七は仰天しました。平次の言葉があまりにも変っていたのです。

「三輪の兄哥、——気がつかない筈はないが、この毛は皆な古い抜け毛だと思

うが——」

「えッ」

「根のある毛が一本もないし、両端が細くなつて枯れているところを見ると、切れた毛や捲り取った毛でもない」

「下手人はお寿の家から抜け毛と剃刀を盗み出し、お政を殺してからわざと掴ませたというのかい」

と万七。

「それでも考えなければなるまいよ」

「ところが、今日は稽古が休みだ。お寿の家へ行った者は一人もありませんぜ」  
お神楽かぐらの清吉は口を出しました。

「本当か、お寿」

と平次。

「お寿は悲しくもうなずきます。」

「朝まで確かにあった剃刀が、誰も怪しい者の行かないお寿の家から飛出して、血染めになって、新鳥越の路地の庇ひさしの上に——梯子を掛けなきや届かないところ

ろに投げ上げてあったのはどういいうわけでしょう、銭形の親分」

清吉の調子は存分に皮肉です。

「だが清吉兄哥あにい、お政の傷は前から斬ったものじゃねえ。お寿のような華奢な女に剃刀で前から切られるのを待っているお政でもなからうし、第一あんなに前から切っちゃ、返り血を浴びて大変だ」

「——」

平次は板敷に崩折れたままのお寿の清らかにさえ見える姿を見やりました。どこを捜しても、血の痕などはありません。

「後ろへ廻つて、右逆手<sup>みぎさかて</sup>で切ると、あんな具合になるが、後ろから斬られながら、お政の手はどう伸びて下手人の髪を掴むんだ」

平次は仕方<sup>ばなし</sup>断になりました。なるほど、後ろから逆手に持った剃刀で喉を切られながら、相手の髪を掴めようはありません。

「なるほど、こいつはむずかしい」

ガラツ八もやってみましたが、どうもうまく行きそうもないのです。

「だいぶ面白そうだな」

そこへ顔を出したのは、見廻り同心の南沢鉄之進でした。

「旦那、ちょうどいいところへ」

平次と万七は迎え入れて、今までの経過を細々と説明<sup>こまこま</sup>します。

「なるほどどつちにも理屈はある。が、こう証拠が揃っちゃ、お寿を許すわけにも行くまい。ともかく、南の御役所へ伴れて行って、平次にはもう一と働き

して貰うことだ」

南沢鉄之進はそう言いながら清吉を顧みまかえりした。お寿に縄を打てというのでしよう。

## 六

平次はその足ですぐお寿の家へ行きました。妹のお文と内弟子が三人、下女が一人、更くる夜を寝もやらず、不安と疑ぎ惧ぐとに顫ふるえていたのです。

「銭形の親分さん、どうぞ、お願い、——姉を助けて下さい、人なんか殺せるような姉じゃございません」

飛んで出たのは、妹のお文でしょう。丸々と肥った十八九の娘、姉のお寿とはちがって、激情的で一本調子で、その代り少しお転婆です。

「それはよく解っているよ。助けようと思えばこそやって来たんだ、——隠さずに教えてくれ。第一番に訊きたいのは、今日は本当に誰も来なかったのか」と平次。

「お稽古の休みは、なるべく人に来て貰わないようにしています。姉はあの通り、身体も心持も弱い人で、時々は一日のんびりと休ませなきゃなりません」とお文。

「お政が来た筈じゃないか」

「でも、それは勘定に入らないでしょう。殺された人ですもの」

「なるほど、そう言えばその通りだ」

平次は苦笑しました。その謎めいた言葉の真意は誰にも解りません。

「剃刀が今朝まで鏡台にあった——とお神楽の親分に申上げたのは、ありや間違いですよ。この二三日、誰も使った者がありません。今朝私が使ったのは、

なくなつた方のだと思つたのは間違いで、新しい籐も何にも巻かない剃刀の方でしたよ、親分さん」

お文は一生懸命でした。姉思いらしい一途さは、涙ぐんだ眼、わななく唇にも溢れます。

「それがいけないよ、——そんな拵え事を言うから、お寿が疑われるんだ。物事はありのままに言うに限る。なくなつた剃刀が今朝まで使つていた品なら、それでいいじゃないか。下手人はどうせ巧みに企んだ仕事だ。皆なの思いも寄らない事をしてゐるに違いない」

「——」

囁んで含めるような平次の言葉に、かりそめの拵え事を言つたのを愧じて、お文は丸い顎を襟に埋めました。

「ところで、お政は帰るとき、髪乱れか、化粧崩れを直した筈だが——」



「え、その鏡台でしばらく顔を直していました」

「ギヤマンの懐中鏡ふところかがみがあつた筈だが、見せてくれないか」

「鏡台の抽斗ひきたしにありますよ」

「――」

平次は桐の枠わくに入れた小さいギヤマンの懐中鏡を取上げました。枠にも鏡にも何の変りもなく、裏を開けて見ると、水銀は少しこぼれておりますが、わざと取つたというほどではありません。いや搔き取つたにしてもほんの少しばかりだったのでしょう。

「近ごろ山口屋の主人が来るそうだが、お寿の世話でもするつもりだったのかい」

「さア――」

お文はさすがに言い渋りました。蔵前だいつうの大通と姉の情事じょうじを岡っ引の耳へなど

入れたくなかったのでしょうか。

「正直に言う約束じゃないか」

「それは、いろいろ仰しゃって下さるそうです」

「泊って行くような事は？」

「そんな事はございません。お酒を召上がると、いい御機嫌でお帰りになります」

「それからもう一つ訊くが、今日お政がやって来たのは、何か差迫つての事でもあったのか」

「大さらいの相談のようでした」

「来ると、いつでも、あんなにゆっくりいるのかい」

「いえ、三年に一度もいらっしやいません。珍らしい事で、姉も大変喜んでいらっしゃる様子でした。近ごろ二人の仲が、何となく面白くなかったものですから——」

言いかけてお文はふと口を緘つぐみました。言つてはならぬ事に触れたと思つたのでしよう。

「有難う、あまり心配しない方がいいだろう」

平次はどつちともつかぬ事を言つて、夜更よふけの街を、神田へ歸つて来ました。

## 七

「親分、いろいろの事が解りましたよ」

ガラツ八が神田の平次の家へ飛込んで来たのは翌る朝でした。

「鏡の事から先に話してくれ」

平次はガラツ八の饒舌おしゃべりを整理するように、こうきり出します。

「お政の懐中鏡は、水銀みずがねがピカピカついていますよ、鶉うの毛ほどの傷もない位

で、——七八年前に二両二分で買ったそうだが、物持ちのいい女じゃありませんか」

「それから、浜名屋の又次郎はどうした」

「師匠に死なれて悄気返しよげつていますよ。首くらい縊くくり兼ねない様子で」

「嘘だろう、あんなに浮気な女共に騒がれる男は、薄情なところがあって、容易に死ねないものだ」

「へエ」

「お前などは捨てられると死ぬ方さ、ね、八」

「そんな心持になって見たいね、親分」

「無駄は止して、山口屋は顔を見せないか」

「金持は薄情ですな、七里潔灰けっばいで」

「涼船でお政を助けた船頭が解ったか」

「こいつは大手柄でしたよ。朝っから飛廻つてようやく突き留めました。浜町の  
大野屋の船頭で、喜七という——」

「あの晩通り合せてお政を助けたのか」

「それが不思議なんで、客が一人で船を出させて山口屋の船から離れないように漕こがせていたそうですよ——こんな晩は水に落ちる人があるかも知れないから気をつけてくれ、——と言つたそついで」

ガラツ八の話は怪奇にさえなります。

「その客は誰だ、解っているだろうか？」

「それが解らないんで、暑いのに頬ほ冠かぶりを取らなかつたと言いますよ。それに、お政を水から救い上げると、すぐ姿を隠してしまつたそついで」

「フーム」

平次は唸りました。容易ならぬ企たくらみが匂います。

「船頭はいつでも来てくれる事になっていますよ」

「それじゃ気の毒だが馬道へ伴れて行って、お葬式とむらいの支度で集っている人間の首実検をさしてくれ。その中から頬冠りほくわんりで船を雇った人間が見つかりや、占めたものだ」

「そんな事ならわけはありません、親分は？」

「横山町の唐物問屋を探して、オランダ物の直しをする家を見つけて来るよ」

平次の言うことは、まだガラッ八には謎でしたが、山が見えたことだけは確かのようにです。

その日の夕刻、平次は馬道のお政の家へ行きました。

「何を言やがる。つい先月、この船頭を頼んで、涼船から落されたお政を救い上げたのは又次郎だ。去年の暮みづがねに、水銀を湯呑の中から見つけたのも又次郎さ、

——昨夜煙草を買いに出た序ついでに、何をしたか解ったものじゃねえ、一応調べる

に不思議があるものか」

漏れて来るのは、ガラッ八の大啖呵おおたんかです。

「八兄あにい哥、たいそう大きな口をきくが、こいつは又次郎の知ったこつちやないよ。又次郎は二度もお政を助けただけだ、お政殺しかかわりに關係があるものか」  
そう言うのは三輪の万七の子分のお神樂の清吉でしょう。

「關係のないのはお寿も同じことだ。とにかく俺は又次郎をしよつ引いて、訊いて見たいことがある。繩張話は後でつけようじゃないか」

ガラッ八は突っ張りました。

「八兄哥、お寿はもう白状しているんだぜ。この上、変なことをするのは無駄骨折ねたりだ。錢形の兄哥にもそう言ってくるんな。小唄の師匠同士、芸の上の嫉みから、お政を殺したに相違ありません、と、ツイ先刻申上げてしまった。お政の外に下手人などがあるわけはねえ」

これは三輪の万七でした。

「」

## 八

「御免よ」

その争いの真ん中へ、銭形平次は入って行きました。

「あ、親分、頬冠りの客は又次郎ですよ」

ガラッ八は部屋の隅に小さくなっている浜名屋の又次郎を指しました。

「銭形の、——俺は喧嘩を売りに来たわけじゃねえ、八兄あにい哥いがお政とむらいの葬式とむらいの支

度の最中へ飛込んで、又次郎を縛るの、山口屋が下手人だろうのと、無法な事を言うからツイ縄張話を持出したまでの事だ。悪く思ってくれちゃ困るぜ」



三輪の万七は静かですが、皮肉な調子でした。

「有難う、三輪の、八の野郎が何か夢でも見たんだろう。又次郎にも手落ちはあるが、下手人じゃない。山口屋などは最初から何のかかわり関係もなかったのさ」

「それ、見るがいい、八兄哥」

清吉は平次の言葉に勢いがよくなりました。

「だが、お寿にも罪はないぜ、お神楽の」

「えッ」

「下手人は思いもよらぬ人間さ。いや幽霊と言った方がいいかも知れない——可哀想にお寿は何にも知らねえ」

「そんな筈があるものか。人の仕事にケチをつけるんじゃないな」

三輪の万七は顔色を変えました。

「最初から筋を立てて話して見よう。違ったところがあったら、そう言ってくる」

れ」

平次は静かに話し始めます。

「よし、聞こう」

一座は固唾かたずを呑みました。夕づいた陽は縁側に這って、棺の前の灯あかしが次第に明るくなると、生温なまぬるい風がサツと吹いて過ぎます。

「お政は近ごろ年を取って、芸も容貌きりようもだんだんいけなくなつて来た。人気は皆な、若くて綺麗なお寿に集るし、大事な旦那の山口屋まで、お寿ひさの方へ入り浸つてお政には切れ話を持ちかけている——。

お政は口惜くやしかった。居ても立ってもたまらないほどお寿が憎かった、——お寿を一と思いに殺せば何でもないが、それでは世間の人がお寿が可哀想だと言うだろうし、殺したお政は、世間の憎しみを受けて、処刑台しおきだいに昇らなければならぬ。人気稼業のお政、世間からチャホヤされてきたお政には、それでは

我慢が出来ない。死んでも人気は落したくなかった。——いろいろ考えた末、第一番に、お寿に水銀を吞みずがねまされ損なつたと世間に言いふらそうと思いついた。自分のギヤマンの懐中鏡の水銀を剥はがして、清松の大さらいのとき、わざと又次郎に見つけさせるようにした——。

その証拠は、お寿の懐中鏡の水銀は傷んでいるが、わざと剥がした跡はない。お政の鏡の水銀はあんまり無傷で新しい。ギヤマン鏡の水銀は、とても五年と保もたないものだ。不思議に思つて、江戸でたった一軒の、和蘭物オランダものを修繕なおす家で訊くと、近ごろギヤマンの懐中鏡の水銀を貼りかえたのは、お寿じゃなくてお政だった」

一座の人々は、線香臭い中に、黙つて顔を見合せました。恐ろしい沈黙の中を、平次の声だけが、低いながら凜りんりん々と響きます。

「涼船から落ちたのも、お政の狂言きょうげんだ。この時は一人ではどうにもならないの

で、浜名屋の又次郎にそれとなく頼んで、引揚げて貰った。——ずいぶん命がけの仕事だが、女が思い詰めると、それ位のことは何でもない——。

お寿はだんだん世間から疑われて来た。が、まだ仕上げが出来なかつた。そこで八五郎を手なずけて、たくさんの証拠を見せ、お寿を疑わせるように仕向けさせた。が、——俺が一二日のうちに行く——と聞くと、その謀計たくらみがばれるのが怖さに、あわてて、取っておきの仕事に取りかかつた——。

昨日お寿を訪ねて、顔を直す振りをして、剃刀かみそりとお寿の抜け毛を盗み出し、お寿へ無理にせがんで、途中まで送って貰った。時刻を測はかって、暗くなるのを見越しての仕事だ。お寿と別れると、新鳥越のかねて見定めておいた路地へ入って、左手にお寿の抜け毛を掴み、右手に持った剃刀で、自分の左の喉をほんの少し掻き切った。——いや、ほんの少し掻き切るつもりだったが、手元が狂つたのと、小唄の師匠で、咽喉のどぶえ笛を避けたのが反って悪かつた。思わず手が滑つ

て、深く切ったのが、あの通り急所だ」

お政は咽喉笛を避けて切ったために、自分の頸動脈を切ってしまったのでした。

「剃刀を庇へ投り上げたのは誰だ」

三輪の万七は最後の切札を叩きつけました。

「自分の喉を切って、すぐお政が投り出した。最初から刃物を捨てるのが大事な仕事のひとつと覚悟していたので、深傷にも拘わらず、思わず力が入って庇の上へ投り上げてしまった、最後の一念と言うものだろう」

誰ももう、何にも言う者はありません。

「仏の前で言うのも何かの功德だろう。お政は掻き傷を拵えてお寿を縛らせ、一ぺんに人気を落してやりさえすればよかったが、手が滑って死んだのも自業自得だ。——今じゃあの世で後悔しているだろう。仏に代って、俺が懺悔して

やる。みんなお政の心得違いからだ、——この殺しには誰も罪はない」  
平次はそう言いきると、棺の前に膝を突いて、香を捻ひねりながら黙禱を捧げました。

誰も物を言いません。涼し過ぎる夕風が、お政の遺骸の前に灯ともった蠟燭ろうそくを、  
生命あるものの如く揺がします。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十一年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行  
銭形倶楽部

小唄お政





# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>